

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第187号&第188号

(2024.9.15-2024.9.29)

- ◆ 参加者：東ころ、水の眠り、しまねこくん、多生、吾意羅、菊池洋勝、胡椒黒、片羽 雲雀、うつわ、リンネリンク、西脇 祥貴、ユミヨシ、クイスケ、山野たみ、石原とつき、何となく、短歌、昌、おかもとかも、花野玖、朝森たけ、西沢葉火、輪 井ゆう、蔭一郎、sage、牛田悠貴、江口ちかる。しろうも、まつりべきん、宮坂愛哲、平松泥沸、空飛ぶ！山田真佐明、山羊の頭、ハツカ館、みや、汐田大輝、松柏木、ひともし庵、城水めぐみ、石川聡、上崎、甘、crazy lover、徳道かつみ、しんいち、月立耀、児島成、鷺沼くぬぎ、石畑由紀子、小沢史、雷らじ、涼、松菊梅、馬勝、古城エツ、中村火柱、same same、もふもふ、奥かすみ、るいくちゃん、シャイニング兄貴、サトポン、毛糸、名犬、ぼち、月波厚生(六六名)

◆川柳・俳句

爽やかに紐になつてくハバック しまねこくん
当選は無効太刀魚でも無効 しまねこくん
こではなくて地虫はコですよ しまねこくん
困つてる人に興味が無いゴーヤ しまねこくん
額縁の外にゴッホの十六夜の しまねこくん
スイスでは鳩をホルンにする季節 汐田大輝
豊島区の生家がおう秋の虹 汐田大輝
知事室を蝕んでいく手毬唄 汐田大輝
鹿眠り夜風に縮んでゆく鞆丸 ひともし庵
鉄塔は巨大あやとりなのですよ 江口ちかる
ザッハトルテに外階段がついている 江口ちかる

苦瓜を快樂として夏、真夏 西沢葉火

空室のランプが灯るガフの部屋 西沢葉火
ワツフルの溝にあなたは落ちたから *so far*

繋がった夜がカスタードに変わる 東こころ
部屋じゆうに流れる星を手ではらう 蔭一郎

傘さして雨月の欄干を歩く 蔭一郎

血を吸ひぬ蚊にも分るか退院日 菊池洋勝

サボテンの村で五感を切り落とす しんいち

お月見を忘れるほどに *五月* 片羽雲雀

傾いた夏にレゲエの揺れる帰路 雷

ジミヘンに似ている人の語る夢 雷

何も無いわたしたしとエヴェレット まつりぺきん

ピアノなら刺身が好きよ十七夜 石畑由紀子

憎めないおじさんだけが住んでいる 牛田悠貴

みんなパフェだねいじめられているパフェ 牛田悠貴

まず母が抜けてジェンガは傾いた 城水めぐみ

あまりにも鶏頭だから産みすてる 小沢史

*

かなしくはないけど道がなくなれば 多生

花野風 疾しさが *HELL* 片羽雲雀

顔見知り増えて行く場所無かりけり うつわ

無知と知を乗り回し中島みゆき 西脇祥貴

デコピンで急に冷めきったサロメ クイスケ

この対価どこから連鎖してますか おかもとかも

大小の命満ちたる秋の川 花野玖

髪も眉も捧げてきてな お歪 輪井ゆう

親友はダブルピースの菊人形 しろとも

残りもの定食。パパの晩ごはん 宮坂愛哲

早く来て本塁打になっちゃう 平松泥沸

腹肉が触れ合う夜と潮の朝 山田真佐明

棒ハンダの鈍い輝き、震える手 松柏木

終バス車庫に沈む 石川聡

またとない秋風のなか紫蘇餃子 上崎

吐息ほどの秋漂う夕 Fall

秋物をしまい忘れて巡る一年 crazy lover

天国のドアと地獄の釜がある 徳道かつみ

逃げていた近本ユニも捕まった 児島成

意気地無く上顎に最中の皮 鷺沼くぬぎ

エロ垢を開いて閉じる子規忌かな 馬勝

秋風にふわり飛び立つコアラが二匹 中村 火柱

あしたには人を憎んでしまう夜 鈴木雀

*

じいさんの数だけ玉手箱がいる 月波与生

◆ 短歌

よつてたかつて冥王星な関係代名詞のなでな暇 石原
とつき

来年もカブトムシとかセミとかを見殺しにして誕生日は秋
ハツカ飴◎短歌

あいまいなおもいでならばうつくしいたぶんおそらくき
つとめいびー mine

カレーなら辛口が好き人生は望まないのに激辛がくる 山
野たみ

早朝にレモングラスの爽やかさひゃつくりを呼ぶ梅握り飯
水の眠り

生き様をブルージーンズに刻むため藍は蒼くて青いキャン
パス 水の眠り

キツチンのちいさなイスと三冊の本だけでももう書齋にな
った 水の眠り

移りゆく時の流れをせき止めて飲み込んだのはちいさいく

じら みや

あの母がなんとしてでも産んだなら わたしは生きていく
しかないね ユミヨシ

駄目になる僕を見るのに耐えきれず僕の部屋を出た君が好
きだよ ユミヨシ

*

柔らかき心の隅の硬き棘君の眠りの中で抜きたや 吾意
羅

無駄なことだけをし合って息をするまったく遠くのひとり
のぼっち 胡椒黒

海を見たただそれだけで凧ぐ心波に攫われ泡となりゆく
リンネリク

ただちよつと線路が並んだだけだった新宿池袋間のように
何となく短歌

あと一歩手が届かずに指の間をすり抜けていく紅い薔薇が
朝森たけ

寄生虫いつそ消えてよこの世から正論不要同意も不要 山
羊の頭

間違いを直すみたいなの付けをする君は今夜月へと帰る
月立耀

さみしさが寄せては返す波のよう安静にして静かに眠る
涼

亡くなった場所が場所であったから僕の友達幽霊になる
松菊梅

近視ではない方の目は老眼でぼやけ始めた行き合いの空
古城エツ

◆詩・短文

作品はありません。

◆作品評から

あの母がなんとしてでも産んだなら わたしは生きていく
しかないね ユミヨシ

〜沁みる。ユミヨシい〜。(ろいくちゃん)

駄目になる僕を見るのに耐えきれず僕の部屋を出た君が好
きだよ ユミヨシ

〜その情景がありありと浮かんできます

せつなさも甘さもあって良すぎます。文学に馴染みの無い
人にも刺さりそうです。(シヤイニング兄貴)

秋物をしまい忘れて巡る一年 crazy lover

〜私は年中だしてある。インナーにしたり色々するか
ら。(サトポン)

キッチンのおいさなイスと三冊の本だけでももう書斎にな
った 水の眠り

〜好きです…!いじらしい、でも満ち足りた空間です
ね(毛糸)

額縁の外にゴッホの十六夜の しまねこくん

〜高校の時の美術教師いわく「前衛派で額縁にまで絵を
描く画家もいますが、ゴッホの絵を観ると、いい絵はちゃ
んとキャンバスに収まるものだ、というのが分かります
ね。」だそうです。いい先生でした。(鷺沼くぬぎ)

切妻屋根には。パブーシユカをかけなさい 江口ちかる

〜と命令されても困るのだけど「パブーシユカ」が似合

いそうな切妻屋根はありそうだ。(月波与生)

一日で箱から象がいなくなる きらめ紀

「象」を書いた川柳は数多あり佳句も多いので評価が辛くなるのだけど(月波与生)

相撲取りの裸でテレビを見比べる 雷

「家電店のテレビ売り場の光景。普段は気にしない相撲取りの肌の色を見比べて購入を決めている。日焼けサロンにでも行ったかのような尊富士を見比べる。(月波与生)

きらきらの子宮で産んだおともたち やは

「おともたち」を産んだのか「おともたち」が産んだのかわからない不安は出産を待つ者の不安だ。「きらきらの」が不安を払拭させる。(月波与生)

傘さして雨月の欄干を歩く 蔭一郎

「いい句をありがとうございます。シンプルで堂々としています。(名犬 ぽち)